

《開催概要》

1. 日時 2022年10月18日(火) 9:30~11:00
2. 場所 J Pタワー名古屋 37階 D.forum2
3. 出席者(敬称略)
 - 粟生 万琴 株式会社LEO 代表取締役CEO
 - 石川 良文 南山大学総合政策学部 教授
 - 内田 俊宏 中京大学経済学部 客員教授
 - 佐藤 航太 名古屋商工会議所 産業振興部長
 - 佐橋 宏隆 STATION Ai株式会社 代表取締役CEO
 - 柴山 政明 愛知県経済産業局 革新事業創造部長
 - 山下 哲央 一般社団法人中部経済連合会 イノベーション推進部長

《議事次第》

1. 開 会
2. 議 題
 - (1) 革新事業創造戦略(案)について
 - (2) 提案の募集について
 - (3) 優れた提案の選定について
3. 閉 会

【座長挨拶】

○内田座長

皆さんおはようございます。第二回革新事業創造戦略会議、革新的な事業を練る会議ということで、本県の産業構造にとって革新的な事業というのが今後5年、10年の間にどれだけ生まれてくるのかというのが重要になってきます。現在も円安でなかなか利益が出にくい、原価構成比率が高い状況で、将来的には自動車産業をはじめ革新的なアイデアをもとに高い付加価値を求めていかなくてはいけないということで、STATION Aiの整備とは別に革新事業創造戦略会議として、産学官金による提案プラットフォームというものを構築しながら推進していく、その流れを作っていくということです。将来的には行政、官民連携、PPP的なところを中心として、民間を支援していくようなプロジェクトが出てくると思いますが、委員の皆様から、プラットフォームの構築や、推進体制へのご示唆などをいただけたらと思います。国に先行して愛知県が進めていくことであるので、場合によっては国の先行事例となるようなこともある非常に大事な会議でございます。

では早速今日の議事に入っていきたいと思います。お手元の議事次第のように、議題が3

件ございます。(1)が革新事業創造戦略(案)について、資料の1-1から1-3まで、(2)提案の募集についてと(3)優れた提案の選定については資料2-1から3までとなっております。それでは(1)の議題について事務局から説明をお願いします。

<議題(1):事務局説明>

資料1-1~1-3、鬼頭委員ご提出意見等に基づき説明

【各委員発言】

(内田座長)

ありがとうございました。事務局から説明がありましたが議題(1)についてこれから議論を行っていきたいと思います。最初に鬼頭委員からご意見がありましたが、プラットフォームに新たな提案が多くなされるというのが必要で、企業、大学や研究所などに事務局が直接説明を行っていく必要があるかと思います。では各委員からご意見をお願いいたします。では粟生委員お願いいたします。

(粟生委員)

2つあります。小さなところからいくと、鬼頭委員からのご意見にもあります、A-ideaの件です。多くの人に知らせて、広報活動し、認知・周知を行うことが重要かと思います。チラシ案の裏側に「県に優れた提案として採択された」や「愛知県庁と一緒に仕事できた」とキャッチがあるのですが、少し違和感があると思っていて、プラットフォームを運営するのは愛知県ですが、県内の産学官連携で、オープンイノベーションなり新たなプロジェクトができるというのが重要なので、これを見ると県庁が何かをやってくれるようにみえてしまいます。A-ideaに登録するとどういったプロジェクトができるのか、だれと何ができるというのがわかるようなキャッチコピーに変えたほうがいいと思いました。

2点目は、GXとDXというところがあると思いますが、革新事業を行うには人づくりから行っていく必要があると思います。特にDXの分野において、デジタル教育が愛知県は特に遅れています。2022年から高校一年生はPythonの授業を始めていますが、中学校のテキストプログラミング教育にはばらつきがある状況です。一方、福岡では、全校にプログラミング教育が入っております。名古屋市はもとより愛知県全域でもこのデジタル教育を進めていく必要があると思います。もう一つはGXです。いまSDGsの教育も推進されていますが、徳島県でグリーンイノベーションアカデミーという活動が始まっています。全国の大学生を対象とした環境問題やCN対策にかかわるフィールドワークを通じて学びを深める、そしてグリーンイノベーションアカデミーの卒業生たちが、グリーンテック、アグリテックで起業するというようなロードマップを描いています。私からお伝えしたかったことはGX・DXとも、愛知県は理系の大学が多いですし、そのための中高生のプログラミング教育、もうひとつが生物多様性についても愛知県はフィールドワークできる環境があると

思いますので、そういったアカデミーの設立もこの施策の中に含まれればよいと思います。以上です。

(内田座長)

ありがとうございました。2点大きくご指摘いただきました。1点目の広報のチラシのイメージですが、「県が」というよりは「本県の産業構造に貢献する」とか「産業競争力の強化に寄与する」など大きい話とか、企業や研究者を前面に出したほうがいいかなという感じがしました。また、A-idea の使い方について、より革新的な提案を求めていると思いますので、モデルケースのようなもの、なかなか革新的なモデルケースというのは出しにくいとは思いますが、そういったイメージができるといいのかなと思いました。

2点目の GX/DX というのは、プログラミング教育は全国的にも行っておりますが、レベルがまだ他と比べて遅いと、そういったデジタル教育・データサイエンティストの養成につながるようなプロジェクトも誘導していければと思いました。ありがとうございました。

(石川委員)

まず、前回の会議で発言したと思いますが、プラットフォームの広報を強く行うべきです。次に、今回の資料や戦略案を読むと愛知県内にこだわっている感じがあると思いました。もちろん県内の大学や企業からいろんなアイデアやシーズが出てくるのが一番よいことだと思いますが、オープンイノベーションと言いながら、すごく県内で困っていますというのが強く出てしまうと、県外の人たちから見たら、県内でやっているんだろと思われるので、もう少し広く県外の人たちにもアイデアやシーズを出してもらうようなことがあっていいのではないかと思います。県内でコラボが進む、県外の大学と県内の企業とがコラボイノベーションが進むなど、もう少しオープンな感じで広報ができればと思いました。

それからもう一つが、今回予算・資源の制約がある中で重点分野「健康長寿」や「農林水産業」などスポットが当てられているので、その分野に重点を置いて広報するのがよいと思います。オープンで広くはもちろん、分野も7つと言っているので、「農林水産業」だと農学部であったりとか、「健康長寿」だと健康科学部など、オープンで広くではあるけれど、重点的に行うところの合わせ技で広報は行うのがいいのではと思います。以上です。

(内田座長)

ありがとうございました。最初のご指摘も非常に重要で、オープンイノベーションと言ながらも少しくローズド的なところが出てしまうとなかなか広がりもできないと思いますので、最終的には県内の産業構造や企業に貢献できればという視点で広く広報したほうがよいのではと思います。特に ICT などほとんどが首都圏の企業で、そういった企業を取り込みながら、本県に貢献してもらう流れを作っていければよいと思います。

2点目の大学や研究者、企業など、個別の事業分野がたくさんあると思いますが、より重要な分野については直接担い手に広報し、県の思いを伝えていくようなことも必要になってくると思います。ありがとうございました。それでは続きまして佐藤委員をお願いします。

(佐藤委員)

前回の会議でアイデアは価値だと述べたと思いますが、自分の頭の中を話すというのはすごく勇気のいることで、それが一体どうなるんだろう、誰が聞いてくれるんだろうということが、思いがあればあるほど重要になると思います。うまくその点を説明し、引き出すような表現を用いた広報が重要だと思います。事務局からの説明でプラットフォームの広報をこれから行っていくとあります。商工会議所も協力しますが、私たちの反省を含めると、「社会課題の解決を求める」というのはとてもふわふわとした表現で、本当に困っている人や当事者の人たちの思いの方が、その表現よりもレベルが上だと思います。

例を申し上げますと、今メディカルデバイスの関係で大変お世話になっている企業の創業者は、お嬢様の心臓疾患を何とかしたいという思いからご自身が医療機器産業に入られて、心臓疾患をなんとかするための装置はできませんでしたが、その技術がカテーテルに活かされたというストーリーがあります。恐らく課題を解決したいという時には、思いを持っている人がひとつひとつストーリーを紡いでいくことになるので、それをどうやってすくい上げていくのかを意識したほうがいいと思います。そう考えたときに「アイデアをカタチにするプラットフォーム」とありますが、アイデアを持っている人たちの思いがはたしてすくい取れるのかといったことも、補助的な文言で汲み取るようなメッセージが打ち出せたらいいなと思います。優れた提案のプロジェクト化といっても、受け取る側からすると優れた提案が来てほしいのはありますが、出す側が「俺の提案は優れている」と思うかどうかというのはわからないので、「カタチにしたい」とかアイデアやシーズを出す側の気持ちに沿った広報を行っていかないと、上滑りになってしまう、やりたい人に届かないという恐れがあり、注意する必要があると思いました。以上です。

(内田座長)

ありがとうございました。最初のご指摘の、アイデアを登録する研究者や企業にとってそれがどのように使われていくのかというのが一番重要で興味があるところだと思います。最終的にはたくさんアイデアが出てきた場合は事務局でセレクトしてここに上がってくると思いますが、セレクトされなかった提案でも、見どころがあるものは取り上げながらフィードバックして改善してもらうような作業も必要なのかなと感じます。またストーリー性の部分について、どうしても機械的に行うということも必要ですが、思いをもって成功されている方、そういったストーリー性のある思いのモデルケースも示すことができればと思います。では続いて佐橋委員お願いいたします。

(佐橋委員)

一つ目に関しては、皆さんがおっしゃっている通りですが、スタートアップを支援する立場の人間から申し上げますと、PRE-STATION Ai に登録している約 150 社に対して広く広報していきたいと思いますが、ただスタートアップというのは皆さんご存じの通り知的財産の防御が非常に脆弱ですので、自分が出したアイデアに対して誰がどのように使うのかを明確にしないと誰も登録してくれないと思います。登録したとしても中身のない登録になってしまうというのが予想されます。踏み込んだ情報を見る場合には NDA が必要になるというような仕組みもぜひ検討していただきたいなと思いました。

それに関連してソフトバンクとして ONE SHIP というオープンイノベーションのプラットフォームがありまして、それにも関わっていましたが、登録は内容の薄いものがすごく集まる傾向がありました。皆さん登録しておいて損はないと。ただそこでマッチングが起こるかというところ起きません。登録の内容が薄いからということと、登録の数が増えてくると一個一個探すのが大変ということだと思います。どういう業種・どういうセグメントの話が今集まっているのかというのをダッシュボードのように俯瞰して見られる画面や UI を検討していただけたらいいなと思いました。

最後は広報活動について、広く広報していくだけでなく、特定の分野だけアイデアが集まってきたら業界団体だとか、個別の企業にアプローチをかけてマッチングを促すといったこともしてはいいのではないかと思います。そこまでしないと実際はマッチングしないとか、ただリコメンドをするだけでは動いていかないというのが実体験として感じております。どこかで人が介在してマッチングを作っていくことが必要だと感じております。以上です。

(内田座長)

ありがとうございます。今ご意見頂戴したアイデアの取り扱いというのは、各委員からもお話をいただいておりますが、内容の薄い登録にならないようにとか、具体的に個別の企業とのマッチングも行うといった視点も大切だと思います。あと情報がたくさん登録されるというのはうれしい悲鳴ではありますが、情報の内容の質をある程度仕分けできるような形で提示できるとよいのかなと思いました。ありがとうございます。次は山下委員お願いいたします。

(山下委員)

まず広報のところからお話ししていくと、一つあるのが事業自体は今年度だけで終わる話ではなく、STATION Ai もですがこれからも行っていき、5年後10年後も続き、愛知に新たな産業や価値を作っていくことになると思います。広報先に学校とか、次の時代を見据えるような方々のところがないなと考えておまして、今は稚拙なアイデアになってしまうのはありますが、知ってもらうところも大事ですし、今後2、3年後生活をしていて新たなアイデアが生まれたときにこのプラットフォームを知っていると登録してもらえ

ることはあると思います。今年度は革新的なアイデアが生まれる確率は低いのかもしれませんが、そういったところに広報していけると、より息の長いプラットフォームになると思います。

もう一つが、石川先生がおっしゃっていたことと同じで、GX/DXは入っているので色々なところが関わってくることになると思うのですが、5個の個別分野軸がある以上、これも絶対に引っ張られると思います。こういった個別の分野に関わっているところで、新たなアイデアを持っているところは、この分野があるうえになかなか出にくい可能性があると思っています。中部経済連合会でいうと、760社ぐらい会社が集まっていますが、一斉にメールを出したとしても響かないと思います。メールマガジンとして日々情報が流れている中で届かないと思います。重点分野を中心に個別に名指しで広報するなど対応が必要だと思います。以上です。

(内田座長)

ありがとうございました。1点目の高校生・中学生への広報ですが、確かに現在は稚拙ではあるかもしれませんが将来Uターンで起業する場合に対しても広報の意味はあるのかなと思います。分野別に関してはイメージができる反面、イメージにとらわれるというリスクがあります。県にとっては「防災」や「文化芸術」など本県に足りないという問題意識もあると思うので、そのあたりも織り込みながら行っていければよいと思います。

あと、山下委員からもお話がありましたし、石川委員からもご指摘があったように県外の企業からも本県の産業構造に貢献できるようピンポイントにアプローチして協力を促す形でもよいのかなと思います。ある程度成功事例というか、モデルケースを見つけていくというのも重要になると思います。ありがとうございました。それでは最後に柴山委員お願いします。

(柴山委員)

皆さんの意見を踏まえてどのように進めていきたいかというのを説明します。

まず鬼頭委員のご意見については、モデルケースを打ち出してイメージしやすいようにするというのは重要だと思います。

粟生委員のお話だと、GX・DXについて愛知県は遅れていると思いますので、しっかりやってきたいと思います。デジタルキャンパスというのがフランスにあります。アイデアは愛知県内だけではなく外にもあると考えているので、県外からはもとより海外からもよい情報は仕入れようと思います。

石川先生の話では、県外へのプロモーション、提案を受け付けることをしっかり行っていきたいと思います。事業提案がなくてもいいアイデアがあったらこのプラットフォームに登録したいと思います。大学・企業、個別分野のフォローを行っていきたいと思います。今のところ広く浅くといった感じになっていますが、個別にフォローも考えております。

佐藤委員のお話について、スタートアップのピッチをよく聞きますが、ソリューションを先に言うピッチはアウトと言っています。要はプロダクトアウトで「私はこんなことができる」というピッチはだめで、課題ありきのマーケットインにしないと良いソリューションは生まれないと思っています。マーケットインを誘導できるようにしていきたいと思っています。課題ありきでないとプロジェクトとして成立しないのではないかというのがあります。

なお、資料 1-1 の 2 章に分野ごとの課題が書いてありますが、別立てで、課題等を整理した資料集を作るという作業に入りたいと思います。

佐橋さんのご発言に関連して、私はピッチのイベントでは「全部しゃべるな」と言っています。ピッチを開催するときはどこまで情報を出していいのかを気を付けないといけません。一方で、革新事業創造提案プラットフォームでは、情報を出さないと不明確な内容になるので、少し踏み込んだ内容を掲載しないといけません。次の議題にもはっていますが、提案のフォーマットの検討が必要だと思っています。

山下委員の次世代を担う世代への広報はまさにそのように思っています。県では、スタートアップ支援施策の一環として小中学生に向けたスタートアッププログラム研修に取り組んでおり、名古屋市でも取り組まれています。次世代に向けたプロモーションも行い、提案者になりえるようなあるいは起業意識を持った人材を育てるという観点からも広報は行っていきたいと考えています。以上です。

(内田座長)

ありがとうございます。皆さんからご意見いただきましたが、資料 1-1 ですが、愛知県の先行プロジェクトとシーズというのは県内にこだわるのはもちろんですが、そういう意味では広めに広報しつつ、より具体的にイメージできるものを挙げていくのがいいかと思えます。

マーケットインとプロダクトアウトと両方あるかと思いますが、マーケットインは課題解決という部分で企業もこれだったら貢献できるとなると思えます。AI だけでなく人の目も使いながらマッチングさせていければと思います。ありがとうございました。

議題（１）に関してはここまでとして、事務局の方に議題（２）（３）について説明していただきます。

<議題（２）（３）：事務局説明>

資料 2-1 から 2-2、資料 3、鬼頭委員ご提出意見に基づき説明

【各委員発言】

(山下委員)

審査するときは良いか悪いかをまず考えるのですが、たとえば 5 点満点だと 3 点がいい

方向、2点が悪い方向とし、そのうえでどれだけ良いか悪いかで点数を決めます。今回の場合、この配点が100点以上にならないと採択されないとなると、真ん中を基準点とすると結構落ちるなど思っていて、例えば25点の配点だったら良いものを13点、悪いものを12点と基準を明確にしておかないとどこも受からないのではないかと考えています。革新性や実現性はいいなと思っても満点を付けることはないと思うのですが、そうしたときに何も採用するアイデアがないようなことは無しにしないといけないのではと思っています。普通だと何点なのかという基準を持っていたほうが良くて、そこからどれだけ良いか、悪いかは各委員の判断となると思います。例えば基準を18点にします、それより良ければ18点以上、悪ければ18点未満にするといった点数の基準はしっかり持っておいたほうがいいかなと思います。

あと鬼頭先生と一緒にような形になりますが、提案の秘密保持のところはすごく難しいなと思っています。提案者本人の承認があれば開示するという形になると思うのですが、なかなか開示する部分を書くことも難しいと思いますし、その判断も難しいとなると思います。非公開のところでも細かく書けないなという話もあると思っています。そうなる中を見てもよく分からない、あるいはしっかりと書いてもらえないのかなという感触を持っています。これに対する案は持っていないのですが、そういった意見です。以上です。

(内田座長)

ありがとうございました。まず審査方法のところ、私も事前にお伝えしたのですが8割以上となるとなかなか点を付けづらいと思います。革新性とインパクトのところが高いため、実現性や妥当性が低くなっていて、革新性とインパクトがあればなんとなく通ってしまう、それでも通らないと思いますが、配点なども考えてくださっていると思いますが、6段階評価に関しても中間が2と3で難しいのかなと思います。県としてもどの程度採択するかと考えているのかを踏まえてボーダーを設定する必要があると思います。また、トータル的に平均が高いアイデアがいいのか、突き出ているものがあるのか、いろんなタイプがあるかと思っていますので、それらをどう拾っていくかが重要になると思います。

非公開情報にしてもどの程度書き込むかについても、提案者に一度ヒアリングをかけていただいて打開策というのを探していただければと思います。それでは佐橋委員お願いします。

(佐橋委員)

1点目に関しては山下委員と近い意見です。今の審査基準だと、審査委員同士で審査の甘辛が著しく出てしまうだろうなと思います。一つの配点で25点のものもあり、審査員の思いが正しく反映されない審査結果になるのではないかと懸念しています。そうした意味でもどういう状態が整っていれば何点を付けるといった認識合わせをしっかりとやる必要がある、つまり甘辛がでない工夫をする必要があるということです。もしくは甘辛が

出てしまうものとして後から標準偏差を出して、甘辛の最終調整をすとか、そういうやり方が必要ではないかというのが1点目です。それから2点目は、とがった発想を採用するため上位4者の合計が100点を超えるものを選ぶということですが、8人の審査の中で上位4者というのは半分の人から支持をされているということで、その時点でとがったものとは言えないと思います。7人の審査員の中で例えば1人が最高得点をつけていれば合格としてしまうというといった方法も考えられます。1人の最高得点ではなく2人でもいいですしそこは検討の余地があると思います。この方法の場合、審査員が信用できる人であるという大前提が必要ですが、とがった案件が拾いやすいという過去の実績があります。またそれに近いですが、特定の領域に秀でた提案、例えば技術がとがった提案などを必ずしも固定の審査員で正しく評価できるわけではないと思うので、そういった提案があった場合には、外部の専門家を審査員として招聘するような、そんな仕組みも検討してはと思いました。以上です。

(内田座長)

ありがとうございました。審査方法で審査員の甘い辛いがあるのではないかという話で、これまでもいろんな評価の委員会に出ていますが、やっぱり甘い方は甘いし、辛い方は辛いし、採点者の基準をそろえる作業がいます。また、1人の委員が最高得点をつけた案は採用とする方法の提案がありました。1人だとその人で決定となってしまいますので、1人よりは2人ぐらいのほうがいいのではと思いますが、その一方で事務局案の4人だと半分の委員が100点を超えるということで、ハードルが高いと私は感じました。

また、専門性の高いものに関しては外部の有識者から個別にヒアリングをセカンドオピニオンも含め2人ぐらい行ったほうがいいのではないかと思います。ありがとうございました。それでは佐藤委員お願いします。

(佐藤委員)

配点に関しては佐橋委員、山下委員と共感してしまして、偏差など出してうまく修正していけたらいいなと思いました。このアイデア提案の要旨としていろいろ書くところがあります。もちろん書いてもらう側はいろいろ書いてほしいのですが、プロジェクトの概要、要は自分のやりたいことですね、ここでは簡潔に記載するとありますが例を見ると簡潔ではないなと思います。スタートアップはきっと投資家からお金をひっぱるためにいろんなビジネス講座などを受けて上手におっしゃるんですが、そういうきれいな言葉を出せる人ばかりではありません。アイデアを革新的な事業にしていくことを思うと、文章で表現できていない点をどう引き出すのかも重要ななと思います。エッセンスだけ出してくれたらあとは双方向でコミュニケーションをとりながら互いに高めあいましょうというようなメッセージがほしいと思います。書いてくれたら必要に応じてどんどん事務局が連絡させてもらって、最初からきれいに提案を書ける人は少ないですし、そういう人の中にお宝が眠っ

ていることも多いと思うので、それをどう引き出すのが一番大事かと思います。

もう1点は配点についてです。革新性とインパクトに大分比重が偏っているなという印象があって、必要性や妥当性にも目を向けなくてもいいのかなと思います。我々も見てやりたいと思うことは総合評価のところでは点をあげることができる仕組みなので、必要性・妥当性がこれほど低くていいのかなと思いました。以上です。

(内田座長)

ありがとうございました。私も事前に指摘したところなのですが、まず必要性と妥当性が文言だけ見ると非常に意味が似通っていて、中身をみると妥当性のほうは県にとって特有の社会課題の解決など地域性のようなもので、必要性との仕分けは明確にしたほうがいいのではないかと思います。佐藤委員からも指摘があったように県にとって重要な課題、たとえば農林水産業で革新的な事業が少ないですとか、文化芸術やデザイン性が弱いから重点的にやっていきたいなど、その部分の配点が5点から10点だとなかなか拾いにくいので、よいバランスを検討していただければと思います。

また、提案にあたり、文章のうまい人もいれば慣れていない人もいますし、まごまごしていると案を盗まれるような、A-ideaを見るとアイデアがあって先にやってしまえなど、そういう対象になってしまうリスクがあるとの指摘もいただきました。そのあたりも検討いただければと思います。次は石川委員お願いします。

(石川委員)

提案者から資料2-2のような形でアイデアの提案内容というのが出てきて、これに基づいて審査をするということですが、提案内容として記載される項目が審査項目を網羅する内容になっているか、整合できているかというのがよくわからないなと思いました。もう一つは審査員が評価するにあたって書類だけではわからないところがよくあり、また評価項目の意味を全員同じように理解する必要もあります。2段階審査のような形にして書類でだめなものは落として、話を聞きたいものは聞けるような仕組みで委員が理解することが必要ではないかと思いました。

もう一つは評価の視点を委員が理解することが必要ですが、戦略案に書いてある評価の視点と、資料3別紙の基本審査項目に書いてあることとで微妙にニュアンスが変わっているのではないかと思います。先ほど内田先生がおっしゃっていましたが、必要性や妥当性やインパクトの考え方をもう少し整理しないと、これは妥当性ではなく必要性ではないかとか、これは必要性というよりインパクトなのではというところもあるのでもう少し精査してパブリックコメントに出したほうがいいのではと思いました。

あともう一つ、定量的に評価すると委員によって評価にばらつきがあると思います。最終的に出た数字が感覚的にあっていればいいのですが、意外と低く出てしまったとか、すごいのに65点だったとか、出てきた点数にプラスして委員コメントなどで「ここはよかったけ

ど、これは課題だった」などがわかるようにしておくのがよいと思いました。

(内田座長)

ありがとうございました。大きく3点ご指摘いただきましたが、確かにこのアイデアの提案内容から審査項目との整合性がすぐに仕分けできるかというとなかなか難しい感じはしました。

次に書類だけではわからないという、委員の理解が大前提であるというのは、第一段階がクリアしたものはプレゼンしてもらうなどというのがあると理解度が高まると思いました。

3点目は審査項目の仕分けについては必要性和妥当性、項目を読めばわかる場所もありますが精査をしていただいたほうがいいのではと思います。

最後に、私も審査委員などをして受ける印象と同感ですが、個別の審査項目を見ながら採点していった形の採点と、トータルの印象の合計点にずれがあるというのはよくあります。確かに個別項目だけで採点していくと無難なものが高くなってしまふことがありますし、すごくいいのだがなかなか加点しにくいというのがあります。その調整が総合評価25点のみでできるのかというあたりを検討いただければと思います。

(佐藤委員)

石川委員の発言を聞いて思い出しました。図や表、ウェブサイトのアドレスなど、今回の提案様式以外で提案内容を説明する資料を追加提出できるのか教えてください。

(粟生委員)

事務局からシステムのまだなだけで将来的にそうなると思いました。

採点については、私も総論、同じです。評価する側からすると重みづけに差異があると評価しにくくて、評価はオール6段階で評価して、後は係数で×7とか×5とか事務局側でやればいかなと思います。あくまで6段階でシンプルにつけるのがよいと思いました。

二つ目はとがった人も採用していきたいという意図が明確なのであれば、重点分野が7分野あり、専門性が違って来るため、鬼頭先生の意見書にも書いてありましたが7分野の責任者、リーダーシップやオーナーシップを持てる責任者を据えたほうがよいのではないのでしょうか。例えば農林水産分野だとCAGO(チーフ・アグリカルチャー・オフィサー)、DXだったらCDXO(チーフ・デジタルトランスフォーメーション・オフィサー)など7分野のそれぞれの長を審査会において、「これは俺が引き取るよとか、責任もって推進するよ」という、そういった責任者をつけてとがった人も巻き取って推進できるようなこともいいと思います。審査はあくまでスタートラインに立つだけでその後どう成長させていくか、どう伴奏していくかが肝になるので、そういった意味では責任者を明確にするCXO制がいいのではないかと思います。

最後にこれは必ず言いたかったんですが、会議の資料として紙の配布はやめませんか。カ

ーボンニュートラルの話をしているのに紙で印刷して、新人や若手が印刷していると思うと作業がかわいそうですし、さっきも資料2-2を見てくださいというのもPDFだったらすぐに見られるので、必要な方は印刷して会場に持ってくるというのはどうでしょうか。ご提案でした。以上です。

(内田座長)

ありがとうございました。各委員のご意見なども踏まえて追加の意見などございましたら伺いたいと思います。まず全体のご意見いただきながら、柴山委員ご意見いかがでしょうか。

(柴山委員)

まず審査のばらつきがなくなるように、採点の見本や基準を作っていきたいと思います。1回の議論でなく複数回の議論、場合によってはプレゼンの機会を入れるというのもいいかと思います。

専門性が高い提案に対しては、その提案内容に関する外部有識者の事前ヒアリングや、場合によっては戦略会議での評価に参加してもらうことが必要かなと思います。

妥当性・必要性の考え方の違いが分かりにくい、また配点が低いのではないかというご意見についても、しっかり対応を検討していきたいと思います。

また、委員のコメント欄を作って、評価をフィードバックする仕組みも必要かなと思っております。

会議資料のペーパーレス化も移行期間として選択制でお願いしたいと思います。第3回目の会議までに各先生に意見を聞いたりしながら検討していきたいと思います。

(内田座長)

各委員の意見の後で私も発言してきたので改めてお話しませんが、各委員貴重なご意見が多かったと思いますので、事務局と相談しながらまとめてまいりたいと思います。本日の議題としては以上となります。

次回第3回目の会議はいよいよ戦略の策定ということで革新事業創造の枠組みを作っていくということでよろしく申し上げます。

以上